

志摩ギターを楽しむ会 第10回コンサート

2011/11/26(土)19:00~ 於:阿児リナ

プログラム

1st stage ギター 小林恵子

- ・「さくらの主題による変奏曲」
- ・「11月のある日」レオ・ブローウェル
- ・「晩鐘の丘」石川鷹彦

2nd stage ギター 吉川幸伸

- ・「ムーンタン(Moontan)」 Andrew York

休憩

3rd stage ギター Dr.Imoto

- ・アベマリア(グノー) 他

4th stage ギター 広垣 進

- ・ソナ 林短調 L.7 (スカルラッティ)
- ・ソナ 1長調 L.483 (スカルラッティ)
- ・リュート組曲第1番 林短調 BWV996 (バッハ)
- ・ワルツ (ブラーム)
- ・Iリゼのために (ベートーヴェン)

5th stage ギター 広垣 進 & 吉川伸幸

- ・故郷
- ・七つの子
- ・通りゃんせ

会員の皆様へ

今回、第10回の定例コンサートを開催することが出来ました。演奏会ごとにどれくらいの皆様がご来場下さるか緊張の連続ですが、コンサートを続けてこられたのもひとえにクラシックギターファンの皆様の厚いご理解とご支援の賜と感謝致しております。

また、いつも快く演奏を引き受けてくださっている4名の方々にも御礼申し上げたいと思います。毎回聴き慣れた名曲や演奏者の方々の思い入れの深い曲を披露して下さっていますが、本日も珠玉の作品を用意していただきました。芸術の薫り深まる暮秋のひとときクラシカルギターの演奏をご堪能ください。

曲目について

「さくらの主題による変奏曲」はJohn Williams等の演奏で海外でも有名ですが、演奏者小林恵子さんのお父様の編曲でお聴き下さい。幼少の頃からなじみ深く聴いてみえたそうです。

「11月のある日」はLeo Brouwerキューバの作曲家の作品です。冒頭のメランコリックな旋律は一度聴いたら忘れられないような親しげな美しさを秘めています。中間部では曲調が明るくなり憧れを求めるような眼差しを導き出しますが、やがて再び冒頭の旋律が淋しげに戻り、静かに曲が閉じられます。

「晩鐘の丘」石川鷹彦はアコースティックギタリストの草分け的存在。1960年代から活躍し小室等とともに六文銭を結成、その後吉田拓郎、かぐや姫、風、イルカ、アリスなどのバック・ギタリストとして1970年代のフォーク、ニューミュージックシーンにおいて数多くの名演を残す。

「ムーンタン(Moontan)」Andrew Yorkはアメリカのクラシックギタリストであり作曲家。バージニア州で生まれ育ち、ジェームズ・マディソン大学でギター演奏を専攻し学士号を1980年に得る。ロサンジェルス・ギター・カルテット(LAGQ)のメンバーとして活躍する他クラシック・ギターのための曲を数多く作曲している。



「アベマリア」 シャルル・フランソワ・グノー

(Charles François Gounod, 1818年6月17日 - 1893年10月18日) は、フランスの作曲家。わけでも、ゲーテの『ファウスト』第1部に基づく同名のオペラで有名である。バチカンの実質的な国歌である『賛歌と教皇の行進曲』を作曲したことで知られている。

グノーは後半生において主に宗教曲を手掛けているが、中でもバッハの『平均律クラヴィア曲集』第1巻第1曲の前奏曲に旋律をかぶせた『アヴェ・マリア』は有名であり、『グノーのアヴェ・マリア』と称されている。



CHARLES GOUNOD

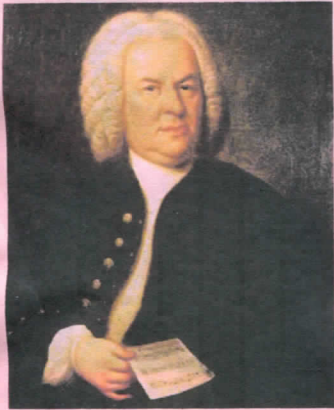
「ソナタ 林短調 L.7 ソナタ イ長調 L.483」ドメニコ・スカルラッチィ (D



omenico Scarlatti, 1685年10月26日 - 1757年7月23日) は、イタリアのナポリ出身で、スペインのマドリードで没した作曲家。同年にJ.S.バッハ、ヘンデルのバロック時代の代表的作曲家が生まれているが、スカルラッチィもその時代の鍵盤曲に新しい用法を取り入れた重要な作曲家である。マリア・マグダレーナ・バルバラ王女のために書かれた個性溢れるチェンバリズムが繰り広げられる55曲の練習曲が、そのテーマ性と展開によって後に「ソナタ」と呼ばれて親しまれている。

ギターにも数多くアレンジされており古今の名演奏家のレコードやCDで聴くことができる。今回来演されているDr.Imotoも学生時代よく愛奏されていた。

「リュート組曲第1番 林短調 BWV996 (バッハ)」



バッハの膨大な名曲・大作の影に隠れてしまいそうなリュート作品ですが、伝えられるところでは、バッハは自ら演奏はできなかったが、リュートをこよなく愛し、リュートの音色の出るクラピコードを愛用していたとのこと。プレリュード、アルマト、クラウト、サラバンド、ブーレ、ジグと6つの舞曲で組み立てられています。

第1番は、1710年代のバッハの若い時の作品といわれているようです。この曲は明らかにリュート、あるいはリュートの音色を求めた鍵盤楽器、ラウテン・ヴェルクの音質を想定して作曲されたようです。第2番は当時からリュートで演奏されていた可能性の高い作品のようです。第3番は無伴奏チェロ組曲第5番の編曲で、第4番は無伴奏バイオリンパルティータ第3番の編曲です。繊細で、柔らかで、厳かなリュートの音は神秘的です。

「ワルツ」ヨハネス・ブラームス (Johannes Brahms, 1833年5月7日 - 1897年4月3日) は、19世紀ドイツの作曲家、ピアニスト、指揮者である。バッハ (Bach)、ベートーヴェン (Beethoven) と共に、ドイツ音楽における「三大B」とも称される。ハンブルクに生まれ、ウィーンに没する。作風はおおむねロマン派音楽の範疇に属するが、古典主義的な形式美を尊重する傾向も強い。

